

畑中良輔 ● Ryosuke Hatanaka

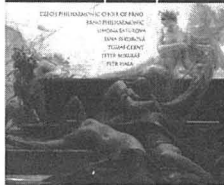
推薦

ドヴォルザークの宗教曲といえば、だれもが第一に挙げるのが《スターバト・マーテル》であろう。次いで《レクイエム》が推されようか。《スターバト・マーテル》は、その抒情性、旋律の美しさで、まさしくドヴォルザークならではの「聖母哀傷」の世界をこまやかに描き出している。今回の《レクイエム》は、旋律的抒情よりも、むしろ音楽の構築性を前面に押し出し、ドヴォルザーク後期の充実、円熟が聴くものの心を捉える。これまでドイツ的に整理され、構築の秘密を解き明かすような、理にかなった演奏を聴かされたこともあったが、やはりドヴォルザークの根底にあるスラヴィックな音とリズムがこの作品には不可欠のものである。この点、ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団、ブルノ・チェコ・フィルハーモニー合唱団の白熱的名演をここに聴けたことは筆者の大きなよるこびとなった。2010年11月のライブである。ヤナーチェクを生んだブルノの郷土性と、その底辺から力強く噴き上げて来る独特の音楽世界は、鮮烈な感動を呼び起こす。指揮のペトル・フィアラのこの曲への共感と自負が圧倒的である。オーケストラの音色、また合唱団の発声統一に至るまでのこまやかな指示。彼自身が立ち上げた合唱団だけに、合唱指揮者を兼ねていることが強い。4人の独唱者はそれぞれ名唱。その中でアルトとバスの歌い手が何とも豊かな声で音楽を紡ぎ出してくる。ソプラノもよく、この人でヤナーチェクが聴きたい。

石田善之 ● Yoshiyuki Ishida

【録音評】合唱も独唱パートも非常にクリアである。中央左にソプラノとメゾ、右にテノールとバスが定位して、ステージのままの配置を聴かせる。合唱のパートごとの定位は明瞭だがオーケストラとのほどよい一体感も聴かせる。チェコ東部ブルノのヤナーチェク劇場でのライブ収録だが会場の響きはやや抑えられぬ。演奏後わずかな間を置いて拍手が入る。〈90〉

Dvořák | Requiem



THE RECORD GEIJUTSU 特選盤

■ドヴォルザーク：レクイエム

ペトル・フィアラ指揮ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団、ブルノ・チェコ・フィルハーモニー合唱団、シモナ・シャトウヴァー(S)ヤナー・シーコロヴァー(Ms)トマーシュ・チェルニー(T)ペテル・ミクラージュ(Bs)
[アルコ・ディーヴァ®UP0130(2枚組)]
¥4515

喜多尾道冬 ● Michifuyu Kitao

推薦

ドヴォルザークの宗教曲というと《スターバト・マーテル》の方が親しまれているが、こうして久々に《レクイエム》を耳にすると深く身にしみてくるものがある。スケールは大きく、それでいて細部がこまやか。メロディは美しいが親しみやすく、敬虔さと真摯さがなくないまぜになって、いつしかゆるぎない信仰の世界に引き入れられてゆく。

フィアラははじめて接する指揮者だが、合唱指揮者、作曲家として名をなしているという。彼はあらゆる誇張を排し、素朴で地味。自己主張の競い合いの時代にこれほど謙抑であろうとするにはとても勇気のあることと思う。あるいはよほど自分の指揮思想に信念がなければここまでさりげなくふるまうのはむずかしい。木管と弦を主体にしたメロディは美しいけれども微小な暗示にとどめ、あとは聴き手の想像力にゆだねる。スケールは大きい自然な包容力から踏み出さない。いわばヒーターで無理やりあたためるのではなく、手で手を包み込む自然なぬくもりを大切にしようとする演奏だ。そのぬくもりのやさしさに時のたつのを忘れ、心の落ち着きがえられる。現代のわたしたちは何に焦っているのか、せわしない生き方を反省させられる。

合唱は指揮思想にぴったりたりたりしたが、独唱陣ではソプラノとメゾ・ソプラノがこのぬくもりの世界に同調、バスもその枠組みを守っている。ただ、テノールのみ作作的なアーティキュレーションなのはどうしたわけか。